

# 韓国語 CALL 教材に関する報告

平 香織

## 1. はじめに

近年、CALL (Computer Assisted Language Learning) による外国語教育が各大学で盛んに行われている。例えば、京都大学では「外国語教育の再構造化-自立学習型 CALL と国際的人材養成」で「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されており、東京外国語大学大学院では21世紀 COE プログラムの研究として「TUFS 言語モジュール」を公開している。上記以外にも論文や報告書、HP を通して各大学での CALL に対する取り組みを知ることができる。

本稿では、沖縄国際大学での CALL システムを用いた韓国語の授業を通して、韓国語教材としてどのようなものを作成したかを報告する。

## 2. CALL システムの活用

まず、CALL の概念について境 (2003) を基に概観してみる。境 (2003) は、本来 CALL は言語学習という「活動」を意味するが、日本では「場」としての教室・設備を意味するようになっていることを指摘し、CALL が「コンピューターを用いた (支援による) 言語学習」を意味することは明瞭だが、「CALL」という用語が指すものが話者によって様々であると述べている。そして CALL が「あたかも LL の要素を併せ持ったものという理解がなされているが、CALL 本来の概念から言って、CALL が行われる「場」としての CALL<sup>1</sup>では、LL の要素はあっても構わないが、それが不可欠の条件であるということはない」(p. 4) と述べている<sup>2</sup>。

CALL 教室において LL の要素は不可欠な条件でないという境 (2003) の見解に基づくと、実際に CALL を目的とする授業において、従来の LL 教室で行われていたような「音声の行き来」だけで終始するのでは、たとえその媒体が変わったとしても、LL 教室を使用していることと何ら変わりはないと言わざるを得ない<sup>3</sup>。しかし実際、機器に慣れるまでは音声を聞かせるだけの操作であっても負担になるのが事実である。

CALL システムを導入している機関ではそれに対応する外国語学習ソフトが入っている場合が多い。沖縄国際大学では『Viva! San Francisco』(英語)<sup>4</sup>、『中国語入門『北京の街角で』

<sup>1</sup> Computer-Assisted Language Learning Laboratory の頭文字をとったものである。

<sup>2</sup> 本稿では便宜上、コンピューターを用いた言語学習を「CALL」、その環境が整っている場所を「CALL 教室」、CALL 教室のコンピューター上で作動しているシステムやソフトを「CALL システム」と呼ぶことにする。

<sup>3</sup> LL の機能や LL で行われる授業内容を否定しているのではない。CALL を「コンピューターを用いた言語学習」とした場合に、教科書の本文を CD で聞かせるだけの授業展開では CALL 教室で授業を行う必要性が感じられないという意味である。

(中国語)、『Fr@nce.go』(フランス語)、『Deutsch Online』(ドイツ語)がインストールされている。諸事情により韓国語の学習ソフトはインストールされていないため、独自に教材を作らなければならない状況にあった。

CALL システムでどのようなことができるのか全く理解していなかった時点で最初に思い描いた教材は次のようなものであった。

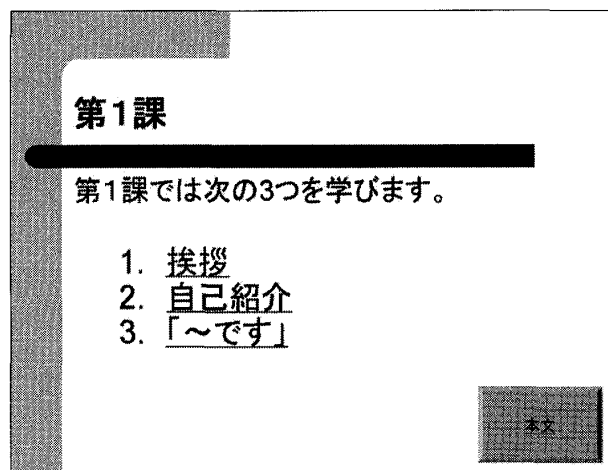


図1.1 目次

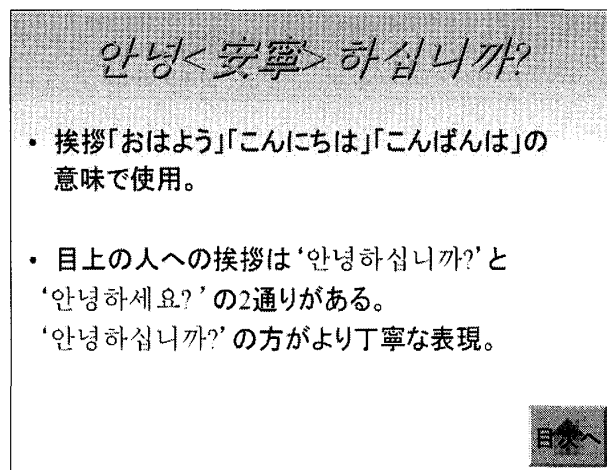


図1.2 項目説明

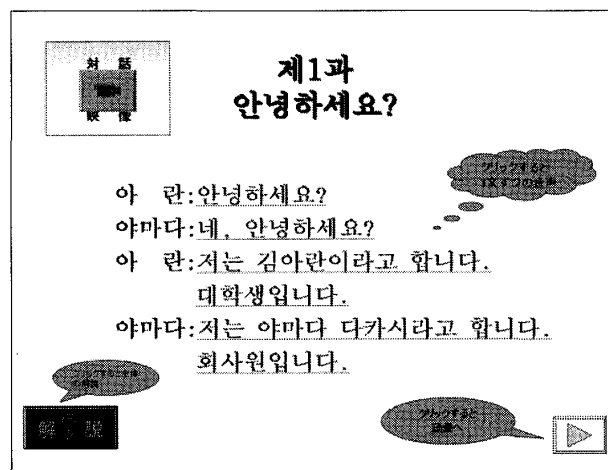


図1.3 本文

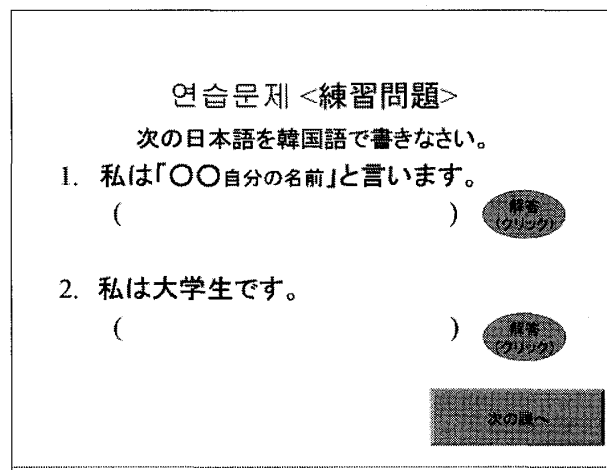


図1.4 練習問題

この課で何を学ぶかという目次を提示し(図1.1)、目次に提示された項目(例:挨拶)をクリックすると図1.2のように説明が表示される。図1.3では本課での本文内容とともに対話の映

<sup>4</sup> 英語については以下のソフトもインストールされている。『英文速読・語彙 徹底トレーニング初級編/中級編』、『TOEIC テスト完全攻略』、『TOEFL テスト完全攻略』、『英検全問題シリーズ』、『英文法徹底トレーニング』。

像が流れる。本文はクリックすると必要な部分だけを聞くことができるように一文ずつの音声を入れておく。必要に応じて「解説」や「語彙」を設け、最後に図1.4の練習問題を解いて1課が終了するという流れである。

図1.1から図1.4のような教材を一から準備するのは大変な作業であるが、設備されているCALLシステムを利用すればある程度の問題作成は可能となる。沖縄国際大学にはCALLシステム‘Calabo 2000’、音声関連ソフト‘Soft teleco’、Web学習・教材ツール‘SMART-HTML’という機器及びソフトが整っている。次節ではSoft telecoとSMART-HTMLによる教材作成とそれを使用した授業内容について述べていく。

### 3. 実践

韓国語学習者が増えるにつれて韓国語に関するCALL教材の研究や実践報告も見られ（油谷 1994, 香山 2000）、実際に自主学习ソフトを公開しているサイトも見受けられる<sup>5</sup>。

沖縄国際大学でも選択外国語として韓国語が設けられており、授業や自主学习でCALL教室の使用が可能となっている。韓国語のクラスについての詳細を述べると、初級に位置づけられる韓国語Ⅰ・Ⅱは前年度（2006年度）計7クラス開講され、それぞれ週2コマで、統一教材<sup>6</sup>を使用した。一方、中級に位置づけられるⅢ・Ⅳは1クラスのみの開講である。また、CALL教室を使用したクラスは初級7クラスのうち2クラスで、週に1回使用しており、中級クラスは月2回の使用であった。

#### 3.1 韓国語Ⅰ・Ⅱを対象としたCALL教材

日本では、大学入学以前に英語以外の外国語を学ぶ機会は少ない。「韓流ブーム」によって韓国・韓国語への関心が高まっていると言われているが、2006年度に担当した韓国語Ⅰの履修者42名中、既習者は2名であった<sup>7</sup>。

韓国語を初めて学ぶ者にとって最初の壁となるのが文字（ハングル）である。これまで触れてきたローマ字とは全く異なるため、文字を覚えるだけでもかなりの時間を要する。そしてようやく文字を覚え、いざコンピューターでハングルを入力するといった段階で問題が生じる。

ローマ字配列で入力可能な言語であれば、たとえそれが初めて学ぶ言語であってもそれほど大きな問題にならない。しかし、韓国語の場合は図2に示すハングルキーボードの配列を覚えなければならない。これは文字入力の問題だけでなく、ハングルを見慣れていない段階ではコンピューターの画面に表示されるハングルの判別が難しいという問題もある<sup>8</sup>。

<sup>5</sup> 韓国語については、同志社大学言語教育センター油谷幸利教授のHP（<http://www1.doshisha.ac.jp/~yyutani/>）や東京外国語大学大学院が公開している朝鮮語のTUMS言語モジュールなどが挙げられる。

<sup>6</sup> 木内明（2004）『基礎から学ぶ韓国語講座 初級』国書刊行会。

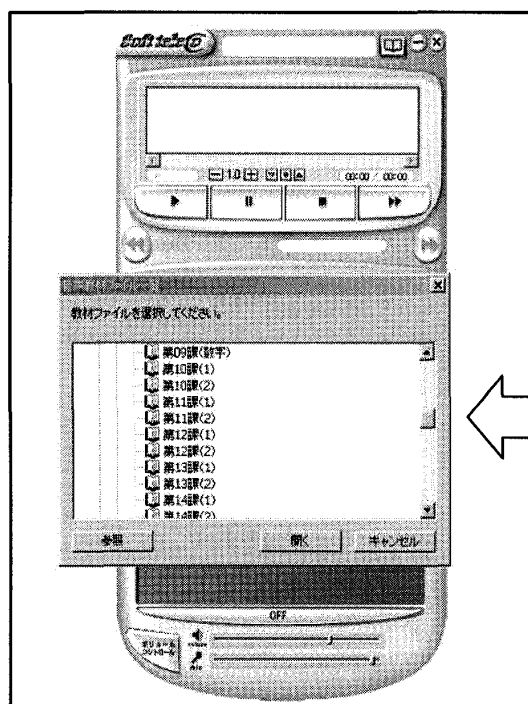
<sup>7</sup> 第二外国語という点が関係していると思われる。専攻語の場合には既習者が多い可能性もある。

<sup>8</sup> 慣れないうちは‘客’と‘亨’のように判別しづらい文字がある。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	=	~	
Q ㅊ ㅑ	W ㅓ ㅕ	E ㅕ ㅗ	R ㄹ ㅓ	T ㅓ ㅕ	Y ㅕ ㅗ	U ㅕ ㅗ	I ㅓ ㅕ	O ㅓ ㅕ	P ㅓ ㅕ	@	「	」
A ㅓ ㅕ	S ㅓ ㅕ	D ㅓ ㅕ	F ㅓ ㅕ	G ㅓ ㅕ	H ㅓ ㅕ	J ㅓ ㅕ	K ㅓ ㅕ	L ㅓ ㅕ	+	*	]	[
Z ㅓ ㅕ	X ㅓ ㅕ	C ㅓ ㅕ	V ㅓ ㅕ	B ㅓ ㅕ	N ㅓ ㅕ	M ㅓ ㅕ	<	>	?	—		

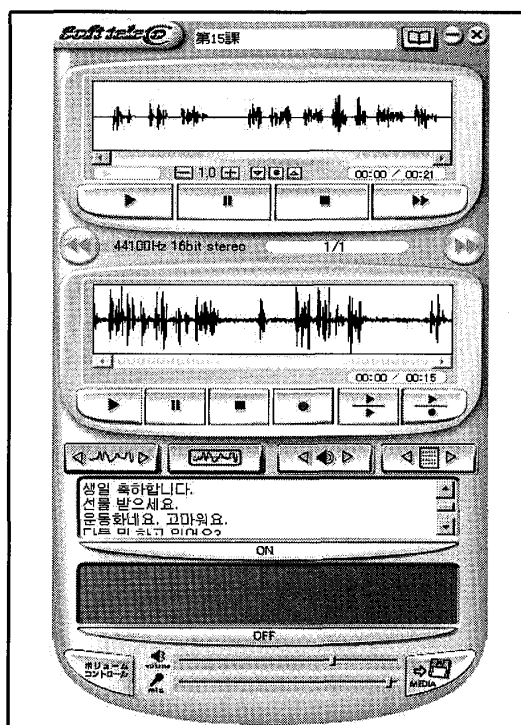
図2. ハングルキーボード

このような点を踏まえて教材作成を行った。まず、Soft teleco を使用した内容をいくつか紹介する。前述したとおりこれは音声関連のソフトであり、聞き取りと発音練習（録音も含む）が主な機能である。このソフトを使用して学生に音声を聞かせるためには予め使用したい音声ファイルを入れておかなければならない（図3.1）。音声を入れておくことで、学生は特定のフォルダからいつでも聞きたい音声ファイルを選択し聞くことができる。I・IIのクラスでは指定したCD付の教科書を学生全員が購入しており、本文に沿って授業を展開しているため、最初にSoft teleco に保存した音声は教科書に付いているCDをwavファイルに変換したものである。



本文の音声だけでなく、練習問題も入れておくと SMART-HTML と組み合わせ使用できるようになる。

図3.1 Soft teleco への音声ファイル保存



← 音声ファイルを開くと波形が現れる。

← 録音すると、新しく波形が現れる。

← 本文を入力。  
ON、OFF で表示・非表示が可能である。

図3.2 Soft teleco による本文表示と録音

初級段階では、教科書を見ながら音声を聞くことになる。しかし、CALL 教室の机は狭く、キーボードを出してしまうと教科書を開いて置くスペースが充分に取れない。また、視点をコンピュータの画面と机の上の教科書を行ったり来たりさせる煩わしさを感じる。それを解消するために、Soft teleco に本文を入力しておくことも効果的である。

また、録音機能があるのでその日の授業の最後に本文を録音するよう指示し、そのファイルを回収する。音声ファイルを持ち帰り、学習者一人一人の発音をチェックして、次の授業で注意すべき発音について説明した。なお、録音した音声は MP 3 で作成されるので USB メモリースティックや CD-R (W) で移動が可能である (20秒の録音で約160KB)。

次に SMART-HTML を使用した教材作成について述べる。Soft teleco を使用するための準備は既存の音声ファイルの変換や独自に作成した音声を編集して Soft teleco に保存さえしておけばよいので、それほど大きな負担ではない。しかし SMART-HTML は実際に入力作業をしないと活用できない。SMART-HTML で作成できる問題形式は「選択式問題」、「キー入力問題」、「文章穴埋め問題」の 3 種類である。

韓国語 I のクラスでは図 2 に示したハングルキーボードを打つことに抵抗を感じる学習者が多いため、ハングルを打たなくても解ける問題を多くするといった配慮が必要である。

このボタンをクリック  
すると音声が出る。

**文字と発音1**

**出題文の右にある音声ボタンをクリックして下さい。**

① 次に発音されるハングルを選びなさい。

㉠ (1) 어

㉠ (2) 오

㉠ (3) 우

㉠ (4) 으

㉠ (5) 이

(10)

**2. ② 次に発音されるハングルを選びなさい。**

㉠ (1) 아

㉠ (2) 야

図3.3 SMART-HTML による選択式問題

図3.3は「選択式問題」を利用して作成した問題である。問題作成時に音声ファイルを貼り付ければ、自動的に再生ボタンが表示されるようになっており、学習者は再生ボタンをクリックすれば何度でも音声聞ける。このような問題は解答するのに番号を選択すればよいので、ハングルを打つ必要がない。ハングルキーボードに慣れてきたら徐々にハングルを入力する問題を提供する。

図3.4 SMART-HTML によるキー入力問題

SMART-HTML の問題を解き終わった時点で学習者は解答ボタンを押し、結果を見ることができるようになっている。特に、図3.4のような入力問題は、図3.5に示すように学習者がどこで何を間違ったのかを確認できるようになっている。韓国語の場合、「分かち書き」<sup>9</sup>への注意喚起にも有効であると思われる。

解答結果				
Good!				
問題番号	解答	正解	結果	配点
1	있어요	있어요	○	20
2	없습니다	없습니다	×	0
3	그럼	그럼	○	20
4	아래면	아래면	○	20
5	만어	많어	×	0
合計得点				60/100

図3.5 解答結果

キーボードでハングルを打つことに抵抗が見られなくなった後期には、CALL を使用して中間試験を実施した。

한국어 중간고사

Ⅱ 次の「 」に相当する韓国語を答えなさい。

A: 1  에 수업이 2  있어요?  
「午前」、「いくつ」

B: 3  있어요.  
「2つだけ」

A: 4  에요?  
「何時から」

B: 5  6  에요. 7  몇 시  
에요?  
「8時から」、「12時まで」、「今」

図3.6 SMART-HTML による文章穴埋め問題

<sup>9</sup> 分かち書きとは日本語の文節にあたるものを離して書くきまりのことである（菅野 1987、文化観光部 1988参照）。

試験内容は「選択式問題」、「文章穴埋め問題」、「入力問題」、「聞き取り問題」の4種類を作成した。図3.6は「文章穴埋め問題」の例である。中間試験の際にCALLを使用した試験に関する感想を求めた結果、試験については従来どおりの筆記試験を望む学生がクラスの半数以上であった。

以上のような利用で、初級段階でもCALLによる学習効果が期待できるだろう。しかし、学生間で文字入力やコンピューター画面上のハングルの判別という点で作業時間に差が出ることから授業よりも自主学習としての効果の方がより期待できると思われる。

### 3.2 韓国語Ⅲ・Ⅳを対象としたCALL教材

CALLシステムを使用する場合、学習者の語学能力が高ければ高いほど多様な教材を提供できるということは、教材作成に携われば誰もが実感することではないだろうか。福島（2004）においても学習者の言語運用力が高いほど利用法も拡大するという指摘がある。

さて、沖縄国際大学での韓国語履修者を見てみると、ⅠからⅣまで継続して学習しようという学生は決して多くない。受講する学生が急激に減少するのは韓国語Ⅱから韓国語Ⅲであり、これはⅠ・Ⅱのクラスが7クラス開講されているのに対して、Ⅲ・Ⅳは1クラスしか開講されていないことから明らかである<sup>10</sup>。視点を変えればⅢ・Ⅳクラスは少人数制であり、学習意欲の高い学生が集まるという語学学習には理想的な環境であると言える。

Ⅲ・Ⅳクラスに集まる学生がどのような学習目標を掲げているかということとそのほとんどが「聞き取り」や「会話力の向上」である。このような学習目標を達成するにはどのような教材を提供できるのだろうか。

教科書の本文を中心としたSoft telecoによる聞き取りや発音練習、SMART-HTMLによる練習問題の他に韓国の歌謡曲やエッセイをSoft telecoに入れて使用した。その理由は、学生間の力の差により、同じ課題に取りかかってもある学生は5分で終わるのに対し、ある学生は10分かかるということがしばしば見られたからである。早く終わった学生には難易度の少し高い聞き取りの練習ができる音声ファイルを準備した。

さらに学生の中には、教科書の内容だけでは物足りなさを感じるという意見も聞かれるようになった。聞き取りと会話力の向上という2つを満たすものは、教材作成を始めたばかりの筆者には作成が困難であったため今回は「聞き取り」に重点を置くことにした。「聞き取り」の練習と言っても単に音声聞いて書き取るだけではⅠ・Ⅱの授業と何ら変わりはない。そこで会話力の向上には及ばなくても、会話で使用される表現の聞き取りを目的とした練習を組み込むことにした。

韓国語において「会話の聞き取り」は非常に難しい。それは菅野（1986）が指摘しており、韓国語は「書きことば」と「話しことば」の差が著しいためである。ある程度の文法事

---

<sup>10</sup> 韓国語Ⅲの受講者は2005年が18名、2006年が22名であった。



項を習得したとしても母語話者が話す会話、つまり「話しことば」を聞き取るには、文法事項の他に「話しことば」の知識と慣れが必要となる。

会話の聞き取りと言って思い浮かぶのはドラマや映画を使用した練習である。映像による学習効果にも関心があったため、映画・ドラマを使用した教材の作成を試みた<sup>11</sup>。ただし授業で使用する教材という観点から、映像を見せるだけでは意味がなく、何が聞き取れて、何が聞き取れていないのかといった結果が得られるような工夫をしなければならない。そのような結果を得るために音声を聞かせること、映像を見せること、問題を解かせることの3つを Soft teleco と SMART-HTML を連動させて使用する教材を作成した。

まず、映像資料を選択しなければならないのだが、選択には次のような点に留意した。

- ・使用されている会話がソウル方言である
- ・学生が既に習った文法事項が入っている
- ・会話が明瞭に聞こえる場面を使用する（車の音や BGM などでは聞き取りづらい）
- ・できるだけ区切りのよい場面で終わるようにする

1つの映像があまり長くないように1分30秒前後とした。資料によって差はあるが会話のやりとりを文字数にすると約300字から400字程度になる。今回は Video CD の映像を使用し、Window Movie Maker で wmv ファイルに変換した。上記の長さの映像ファイルが約1.47MB になる。次に、映像ファイルから音声（wav ファイル）だけを取り出し、図3.1と同じように Soft teleco に保存した。最後に、映像を聞き取れたかどうかを確認するための問題を SMART-HTML で作成した。問題の内容はキー入力問題とした。

上記の手順で作成した教材を学生に提示する時、次の順番で行うように指示をした。

- (a) 音声を聞く（Soft teleco）—映像なし
- (b) 映像を見る（SMART-HTML）—音声と映像
- (c) 問題を解く（SMART-HTML）—音声と映像、もしくは音声のみ

(a) は音声だけでどの程度聞き取れるかを確認するものであり、Word ファイルに聞き取れた部分を書き出してもらい、そのファイルを回収した。音声だけを聞く課題をある程度実行した後、(b) の課題に移る。(b) は音声とともに映像を見せて、音声だけの時と比べて聞き取れる箇所が多くなるかどうかを確認する。そして (c) で実際に問題を解くという順番である。

---

<sup>11</sup> 映像教材の必要性については飛田（2002）を参照。

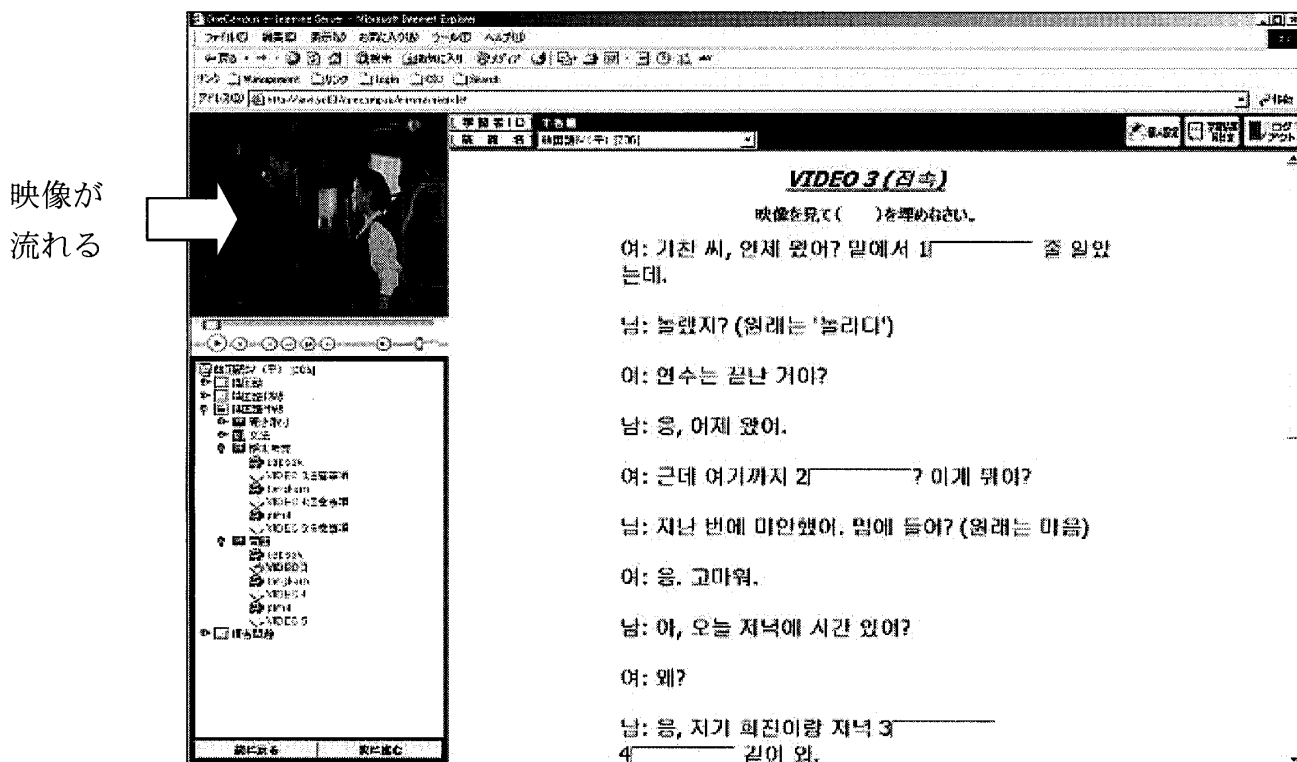


図4. 映像を取り込んだ SMART-HTML

図4は(c)の課題を実行する時のコンピューター画面である。左上の矢印部分に映像が流れる。

学生からは音声だけを聞いたときよりも映像を一緒に見た時の方が聞き取れる割合が高くなったという感想が得られた。また、興味深いのは映像を何回か繰り返して見た後は、ほとんどの学生が映像を見ずに音声だけを集中して聞くようになったことである。今回の教材による学生の反応から映像の重要性が確認できたが、会話の状況把握ができてしまうと、逆に映像が聞き取りの妨げになる可能性が予想される。そのため映像教材を利用する場合には音声だけを別に提供する必要があると言える。

#### 4. おわりに

言語によってCALL教材の開発が進んでいるものもあれば、そうでないものもある。どの言語でどのような教材をどのように使用すれば、どのくらいの学習効果が得られるかという問題については、研究が始まったばかりであると言ってよいだろう。そのため教育機関を越えた情報交換は勿論のこと、言語間でのCALLに関する情報共有も必要である。

今回はCALLシステムがどのような機能を持っているのか、CALLによる韓国語学習の利点は何かが全く分からない状態で上記のような教材を作成し授業で使用した。今後はCALLを使用した場合と使用しない場合の比較や韓国語学習におけるCALLの有用性という観点から

韓国語教育における CALL のあり方を研究していきたいと考える。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり匿名の査読者から貴重なご意見を頂きました。また沖縄国際大学 CALL 管理室の常駐スタッフである小谷涼子氏からは教材作成をはじめ様々な面でご助言、ご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- 香山聡子 (2000) 「朝鮮語 CALL の研究」『中国学志』 謙号, pp. 1-20. 大阪市立大学中文学会.
- 菅野裕臣 (1986) 「中級講座」『基礎ハングル』 三修社.
- 菅野裕臣 (1987) 『朝鮮語を学ぼう』 三修社.
- 境一三 (2003) 「CALL 教室のレイアウトについて—Laboratory から Co-learning Space へ—」
- 野澤和典 他 (編) 『最新外国語 CALL の研究と実践』 pp. 1-32. CIEC 外国語教育研究部会.
- 飛田良文 (2002) 「映像を考える」城生佰太郎 (編) 『映像の言語学』 pp. 9-34. おうふう.
- 福島祥行 (2004) 「外国語教育における CALL 利用法—「フランス語入門」における実践から—」
- 『大学教育』 pp. 47-53. 大阪市立大学大学教育研究センター.
- 油谷幸利 (1994) 「朝鮮語の CAI の研究」『朝鮮学報』 第153輯, pp. 19-36. 朝鮮学会.
- 文化観光部 (1988) 『국어 어문 규정집』 대한교과서주식회사.

## 한국어 CALL 교재에 관한 보고

본고는 오키나와 국제대학에서 CALL 시스템을 사용하여 2006 년도 제 2 외국어로서의 한국어 수업을 어떻게 진행시켰는지 수업 내용 및 교재 작성을 중심으로 소개한 것이다.

한국어 수업은 크게 초급과 중급으로 나눌 수 있는데, 먼저 한국어 초급 수업은 교과서를 중심으로 수업을 진행한다. 따라서 CALL 교재 역시 교과서에 맞추어서 Soft teleco 를 사용하여 ‘듣기/말하기’를, SMART-HTML 를 사용하여 ‘연습문제’를 작성하였다. 그런데 초급단계의 연습문제는 한글을 입력하지 않아도 답할 수 있는 선택 문제를 작성하여야 한다. 그 이유는 초급 한국어 학습자들은 컴퓨터로 한글을 입력하는 것에 익숙하지 않기 때문에 학습자들 사이에 한글을 입력하거나 컴퓨터 화면에 나오는 한글을 식별하는데 시간 차이가 크게 생기기 때문이다. 따라서 수업 시간에 CALL 교재를 사용하는 것보다 개인적으로 학습할 때 사용하는 것이 더 많은 도움이 된다고 생각한다.

다음으로 중급 한국어 학습자들은 듣기와 회화 능력이 향상되기를 원한다. 그래서 이번에는 드라마나 영화를 사용한 영상 교재를 작성하였다. 그런데 중급 수업에서 영상 교재를 사용할 때에는 그 영상을 보여 주는 것에 그치면 학습자들이 학습 목표로 하는 듣기와 회화 능력 향상의 효과를 거두기 어렵다. 따라서 중급 수업은 다음과 같은 순서로 진행하였다. 우선 사용하는 영상의 음성만 들려 준 다음 영상과 음성을 동시에 제시하였다. 그리고 어느 정도 알아들을 수 있는지 듣기 실력을 점검할 수 있도록 연습문제를 부여하였다. 이러한 교재를 사용한 결과, 듣기에는 역시 영상이 도움이 되는 것을 확인할 수 있었다. 그러나 어느 정도 대화 장면을 파악한 다음에는 영상을 보지 않고 음성만 계속 듣는 학생들이 많았다. 그러므로 영상을 사용한 교재는 영상과 음성을 따로 준비할 필요가 있을 것이다.

CALL 교재 개발이 어느 정도 진행되었는지는 언어에 따라 차이가 있을 것이다. 또한 CALL 교재를 사용한 학습이 언어학습에 어느 정도 효과가 있는지에 대한 연구는 시작된 지 얼마 되지 않았다. 그러므로 CALL 교재 개발에 관한 교육 기관들 간의 정보 교환은 물론, 각 외국어에 관한 정보 공유도 필요할 것이다. 또한 앞으로 CALL 이 한국어 교육에 어느 정도 유용하게 활용될지에 관해서도 연구되어야 할 것이다.